自分に与えられた一票のためにできること

五ヶ瀬町　　甲斐　ちえり

「私たち一票一票の投票が、町から県、また国へ、そして国際社会へと反映するならば、二十歳になった今、有権者である権利を最大に生かし、更なるより良い社会を作っていきたいと思います」

これは私の母が三十年前の新有権者意見発表会で述べた一文です。その時から三十年の月日が流れ、平成二十七年六月に改正公職選挙法が施行、投票できる年齢が十八歳以上に引き下げられ、この場で同じ発表をしている私は、十八歳で選挙権を有しました。施行された時私は当時十七歳。十八歳になる年でした。

その年の七月に参議院選挙があり、前もって高校の主権者教育の一環として放課後に模擬投票が三年生を対象に行われました。十七歳の私は、「十八歳で選挙権が持てるなんて大人の仲間入りでうれしいな」という単純な思い出いましたし、実際に模擬投票を行った際も十八歳になっていた同級生がうらやましく思い、「早く私も投票に行きたい」と強く思いました。

選挙権を得て八年間、当時と同じ思いか？　と聞かれると正直そうではありません。

自ら投票に行きたい！！　と思って行くより、家族や周りから行けといわれたから行く。

行かないと何か気になるなという思いで行動している時期もありました。それは社会人になるまで、政治の話をする機会や聴く機会もなく過ごしてきたからです。政治の話題がなくとも友人との話題が尽きない、話す話題に困らない。今の私には関係がない。そうやって人と政治についてはなすことから離れていたのです。

ですが、社会にでてからは一変しました。

現在、私は高校を卒業して郵便局に勤めています。私の職場では、日常的に経済や地域の出来事、世の中のニュースについてや、家のことなどをよく皆で話して、考え方や情報を共有しています。時にはお客様に営業を行う場面でも、経済や世の中の動き、医療費制度について触れてお話しすることもありますし、雑談でも必要な場面があり

ます。その時から政治について話す機会が増え、自分でも新聞やテレビ、ラジオ、インターネット、SNS で情報収集を行っています。しかし、情報収集するだけで良いとは私は思っていません。人と話すことで興味がわき、情報収集したうえで自分の意見を持つことで、周りと話したくなる。この一連のサイクルがあってこそ、人は政治について考え、学び、選挙に行こうと思うのではないでしょうか。まずは「人と話す。」　とても大事なコミュニケーションです。

私は地元五ヶ瀬町を若い力で盛り上げたいとの思いで、後継者不足で耕作放棄地となった農地を交流の場として再生させるため仲間と共に立ち上がり「カタラウスタンド」という名前で活動しています。ここでは、焚火を囲んで心を開いて日常や愛する家族、夢について語らう場所です。第一回目のイベントでは十数名の五ヶ瀬町の若者が集い、夢を語り合いました。その中でも町政や子育て、移住についても意見を交えること、まさに人と話す。

自分の考え方を主張する反面、ほかの人の話にも共感しながら話を膨らませていました。

このような若者が五ヶ瀬の将来を真剣に考える活動がいつか、選挙や明るい未来を創る大事なピースとなると心から確信しています。

私は、投票に行くことは自分なりの考え方を作ってまとめる力を養える絶好のチャンスだと思います。どの候補者に、どの政党に投票したら良いかわからない。その時の社会情勢によっても公約や主張、争点は変わっていきます。候補者の演説や選挙運動、インターネットや政見放送を見て聞いたうえで「今の自分の意見や考え方を代弁してくれる人」
を見つけ、周りの友人や家族と話をすることが大切だと思います。そして、誰かの意見に便乗するのではなく、自分はこういう思いだから、こう主張していきたいと伝えることが大事ではないでしょうか。

誰の意見にも左右されず、自分のために与えられた貴重な一票を私はこれからも投票という私に与えられた手段で、三十年前の母と同じく有権者である権利を最大限に生かし、これからの五ヶ瀬町そして日本を創っていきます。

ご清聴ありがとうございました。